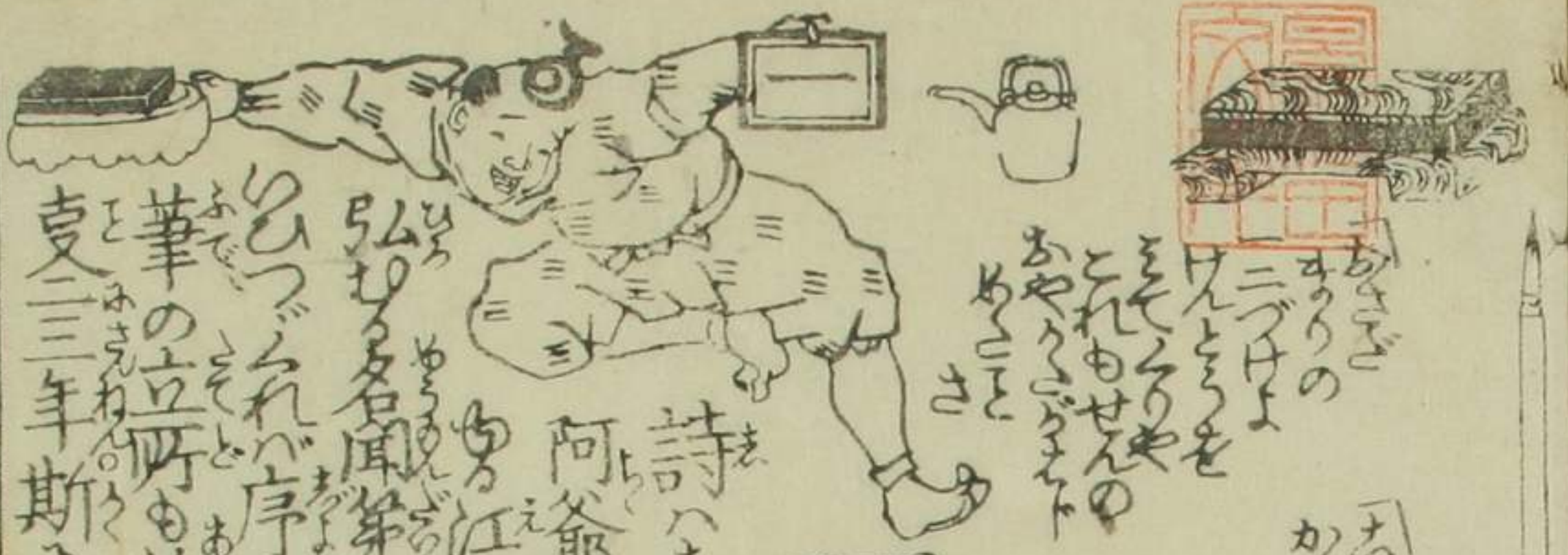


遠時  
2378  
148

弘化三年



詩のあらまを歌の素糸よりあらぬひのけまきたるは戯作者の徳と  
阿翁が一時の口号する戯業の徳つありて初代の功績今茲ふ二代栄  
弘むる名聞第一利欲あるぬ貨物の正直正統交するの癖漢へ各位御存と  
いつづれは序文中凡例るを五湖と的る戯口も向ふぬ掉さる硯の海ふ  
華の立所も後や前家製法の薬不効あれど戯墨も功る名も遂退身  
夏三年斯る拙著と誤認欲具頭肩目飲さるる門首へ訪ひ来れるは二代の舊



かゝるは作者の  
かゝるは作者の  
あれは作者の

作者の  
作者の  
作者の

わが  
わが  
わが







ついでに... 赤本の... 昔の... 赤本の... 赤本の...



あつ... 赤本の... 赤本の... 赤本の...

ついでに... 赤本の... 昔の... 赤本の... 赤本の...



あつ... 赤本の... 赤本の... 赤本の...













こゝに作者のえらの内  
 どもおありそ夫とて  
 小ぶらりてありそ  
 式亭ののたまはけのうら  
 たるのこゝろあつて  
 ありされどかくらん  
 てんどうのうらあつて  
 とまがしめのかから  
 小つらさるゝわれ  
 ちかとのつてきき  
 されとめけんは  
 まさしひひでも  
 つんでもの

國貞  
 豊國  
 虫



小三馬戲作

あつて  
 むの  
 あん  
 さと  
 かん  
 た

あつて  
 むの  
 あん  
 さと  
 かん  
 た

